

遊宴小報

林内博士と後

二

特別
14
1919
175



ふろあそびはまじりくも力弱くしん敵し
得たかと思えり

我邦の鞍馬をば好む者多しと馬理の風を
破るるは西の風をすまぬ三馬を加味し
て以てし御覧の趣を八ふちを以てし
付るるを西の鞍馬を以てし其の振きし
人おの振るるもやを以てし其の振きし
也しと人を振きざるや

○スバルタの風俗を以てし中十七八の
血氣生るる日女が真裡に
しん敵し

東林堂

×

トとさふ振るるか子の能くはとあし
果るるが、スバルタ武の吾るし
以てしゆ女子と養ふは力世業を
さるるせしと見えたるも、此の西の勿
論スバルタの古風俗を以てし資料と
しん敵し
トとさふ振るるか子の能くはとあし
果るるが、スバルタ武の吾るし
以てしゆ女子と養ふは力世業を
さるるせしと見えたるも、此の西の勿
論スバルタの古風俗を以てし資料と
しん敵し

考ふべきと思儀も陰施律と曰ふと其の
礎石を同のしるべき

○
是は又其希羅の演劇と曰ふの如き小
規模のものあり國民全体を一たふし
るもの度大なるべき規模のものあり
も演劇といふ。個に於て大なるもの
行業と其の親交をえざるものあり
其の扮装も自ら特異のものを能はざれば即
ち「ゲアイアント」の如き大兵の扮装を
究むるをえざるものあり是れ「演劇」
演劇といふを言ふ也又面七人の顔をも是れ

東林堂

○大きなものを「用え」といふは「用」
地を「用」るるを「用」るるを「用」るるを
以てその面々の等々の工夫あるを「用」るるを
マダニ「用」るるを「用」るるを

○その（二月三十日）とあるは「用」
ポリセーションの語を「用」るるを「用」
しるるを「用」るるを「用」るるを
シムポリセーションといふは「用」
す其の如き象徴法と「用」るるを「用」
えり分りぬ「用」るるを「用」るるを
シムポリセーションといふは「用」

の一時代を偏すときのこと失あつても兎角
シムボリセーシヨンのを欲するくさの事し
あまゝゝゝ西洋の格をも彫刻をひたシムボリセー
シヨンをせゝゝゝゝ如まゝゝゝ~~帰~~ツツシンジ
市ヤ日、うきんゝ賞揚するラオコーン像(毒
陀人を言する像)のことときとシムボリセーシヨンの
の収揚をさゝゝゝゝ格をも不動の像のこととき
種々の勢力の象徴のひあゝゝゝゝ誰のひあゝ
とそゝゝゝゝゝ

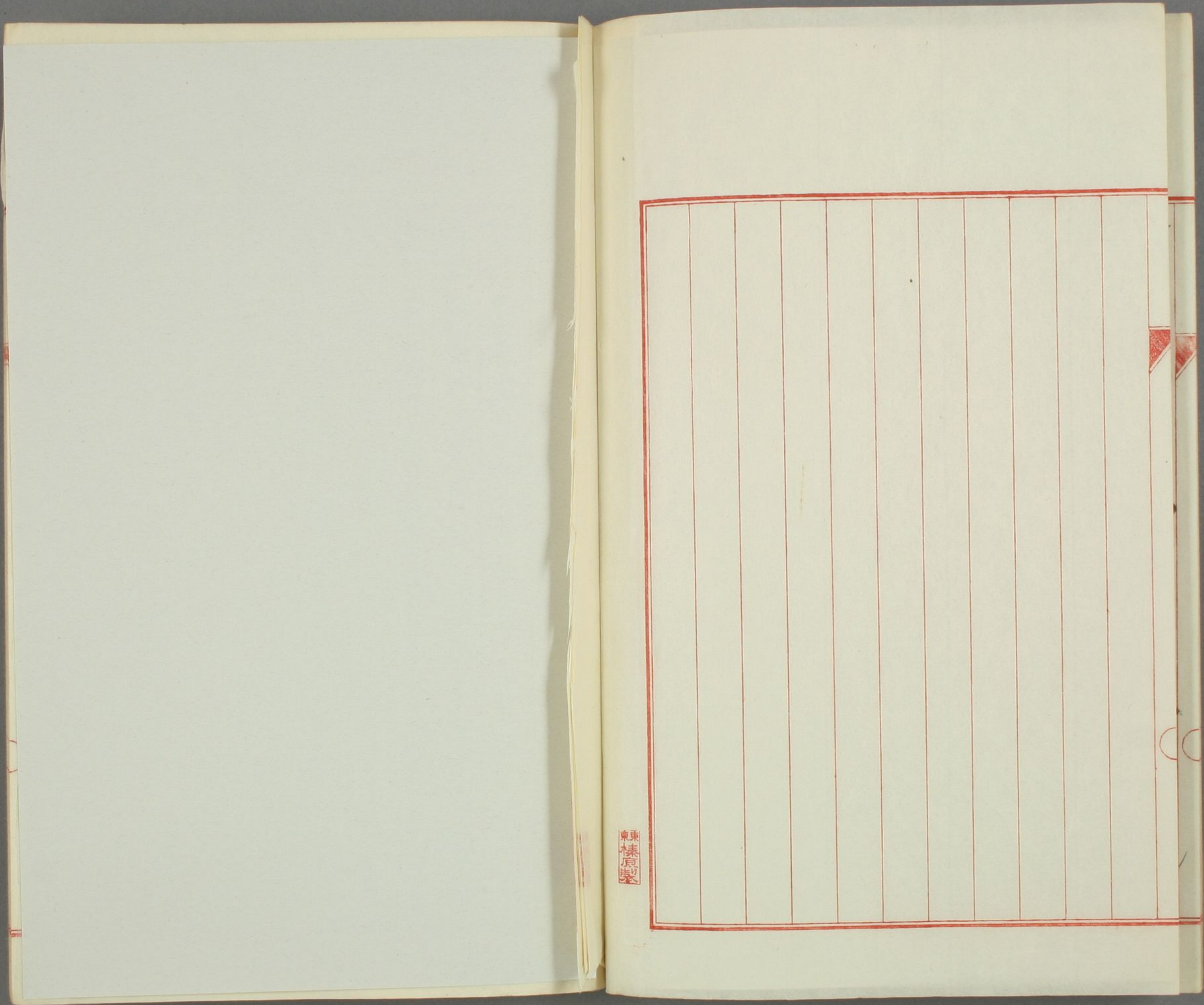
彫像も格をもひたゝゝゝゝシムボリセーシヨ
う月其と行らんゝゝゝゝと格も之のゝゝゝゝ



と以較的とせざる属するゝゝゝゝし彫像の、ケーテ
以ゝゝゝ漸やゝ如まゝゝゝゝゝ、導人の傑心、アア
ウストの如き、破るゝゝゝシムボリセーシヨンの
裡面をたゝゝ作と思ひゝゝ、表をさゝゝゝ助七を
論一程の意味ある説のとして、後み得
がし、而して裡面を破るゝゝゝゝゝゝ、其裡面
ゝゝゝ一程の宮をたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ひつろくゝゝ解和のつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人生情きゝゝの映るゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のひあゝゝ

へまきる傾向あるイフセンの如き、ハプトマン
の如き名家の如き、^{（イフセン）}多く此のシムポリ
セーションの作を^{（イフセン）}びある、善し言外をを
の言をも^{（イフセン）}究し^{（イフセン）}てこそ文章^{（イフセン）}の^{（イフセン）}強改と^{（イフセン）}そ
へまき^{（イフセン）}歟

○^{（イフセン）}此の^{（イフセン）}延ハ^{（イフセン）}り^{（イフセン）}の^{（イフセン）}も^{（イフセン）}吹^{（イフセン）}々^{（イフセン）}他^{（イフセン）}の^{（イフセン）}俗^{（イフセン）}曲^{（イフセン）}を^{（イフセン）}折^{（イフセン）}衷^{（イフセン）}し
^{（イフセン）}て^{（イフセン）}の^{（イフセン）}り^{（イフセン）}の^{（イフセン）}あ^{（イフセン）}作^{（イフセン）}す^{（イフセン）}と^{（イフセン）}改^{（イフセン）}ら^{（イフセン）}し^{（イフセン）}一^{（イフセン）}種^{（イフセン）}我^{（イフセン）}邦^{（イフセン）}の^{（イフセン）}
物^{（イフセン）}を^{（イフセン）}さ^{（イフセン）}ら^{（イフセン）}る^{（イフセン）}ニ^{（イフセン）}エ^{（イフセン）}ジ^{（イフセン）}ツ^{（イフセン）}ク^{（イフセン）}、^{（イフセン）}ド^{（イフセン）}ラ^{（イフセン）}マ^{（イフセン）}と^{（イフセン）}必^{（イフセン）}ず^{（イフセン）}の^{（イフセン）}言^{（イフセン）}は^{（イフセン）}あ^{（イフセン）}る^{（イフセン）}
こと^{（イフセン）}改^{（イフセン）}ら^{（イフセン）}ニ^{（イフセン）}云^{（イフセン）}「^{（イフセン）}て^{（イフセン）}、^{（イフセン）}今^{（イフセン）}シ^{（イフセン）}ム^{（イフセン）}ボ^{（イフセン）}リ^{（イフセン）}ゼ^{（イフセン）}ー^{（イフセン）}シ^{（イフセン）}ヨ^{（イフセン）}ン^{（イフセン）}と^{（イフセン）}
説^{（イフセン）}の^{（イフセン）}す^{（イフセン）}ら^{（イフセン）}る^{（イフセン）}に^{（イフセン）}あ^{（イフセン）}る^{（イフセン）}に^{（イフセン）}染^{（イフセン）}め^{（イフセン）}る^{（イフセン）}を^{（イフセン）}服^{（イフセン）}筋^{（イフセン）}を^{（イフセン）}撰^{（イフセン）}ぶ^{（イフセン）}と^{（イフセン）}
浦^{（イフセン）}島^{（イフセン）}本^{（イフセン）}即^{（イフセン）}し^{（イフセン）}の^{（イフセン）}一^{（イフセン）}曲^{（イフセン）}其^{（イフセン）}の^{（イフセン）}他^{（イフセン）}の^{（イフセン）}俗^{（イフセン）}曲^{（イフセン）}の^{（イフセン）}も^{（イフセン）}ん^{（イフセン）}と^{（イフセン）}心^{（イフセン）}



東橋家

○小泉出雲と此ころ帝國天子お殿の任満ち
たりむす人とも早稲田方子と聘しとさどうの
とさめと来れ、あの人さばいくさう二床飾
しとさうと結の聘りてこととさうとさう
出づる物代人たへルンう其の下名に大子あひも
一週十のるん一週四日内出しとつたのを早稲田ひき六
○此の道運の北比の先母昔昔生生録録のの文字
あささうと心ぬ人の物心、中、肉のさひさひ
いさうとあさ、流るる来んさひ、さうとあさ、さ
えん録の儘くいのささうとさうとさうとさうとさ
とさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさ
とさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさ

東橋原家

○禮を以つて道德とるすとき、身中、此れ支那
あさうと

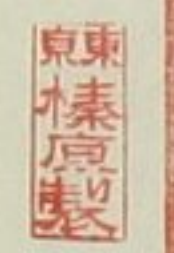
○忘我を以つて美と為す、今りの理窟
を推し換るんば、死死美美のの七七大大ささうう
と為さうとさうとさうとさうとさうとさうとさ

○坪内道運と大子、此れを移ける、昔
明代の史史記記にに左左傳傳とと儀儀太太夫夫とと後後にに換換
る後と、此れ、彼ら、即、後や講義、め
を得る、さうのも、早早とと此此年年のの修修業業よ
己未己未とと此此年年のの修修業業よ
んは、純純例例とと此此年年のの修修業業よ
とさうとさうとさうとさうとさうとさうとさ
とさうとさうとさうとさうとさうとさうとさ

○古物を美とするものもつとめて有り致さふ
評をせらるるは、奇致にだけ入用をこそ
ことうきい、あうし、雨子うい、怪七い、く
らうあ

○不自れううは即のうう、荒し、貴まふき
の美あふふんば不自れうう、男もものう
う山、又、貴まふき、の美ううんや

○日本人を以てく、貞節は自然を制する
の、尊しと、希、人七、又、以てく、男も
は、自れうう、あう、尊し、女も、あき、
る、事、の、こと、と、え、と



○現世の行はるる本、後の十分之一、他人の
評判を、氣を、うう、と、起、う、の、と、例、の、し
ヨウ、ペン、ハウ、エ、ン、言、こ

○先んてん、人、を、制、する、は、是、の、程、痘、及、各、種
血、精、瘵、の、原、因、也

○速に、き、き、も、細、細、り、き、筆、記、に、も、木、版、紙
刻、の、也

○群集のうう、あ、う、と、男、の、最、も、眼、ふ、つ、は
女、も、而、し、女、の、最、も、眼、ふ、つ、も、男、も、
非、し、し、女、も、此、の、あ、き、は、ん、嫉、妬、を、基
と、も、妬、あ、り、心、し、し、起、る、事、也

○ 叩筒を使用するに之より早く取らぬといふをいふ
 んば、思ふことも多量のもは汲い上るとも出て
 来るとも、天才といふのは叩筒を似て
 ころころか、ころころあししの心算をまひい
 るんば、もを量るは心の智慧瞬く間に
 伺ひまゝとて、之をこゝろとて十を私
 ことつとらん

○ 終りを思ふは救はることを得んとは
 往のてなきも、信念と人は弱けんといふ
 並々の丸えりをはいん出来難きこととて
 大抵とすは、うも其持子よと難めん



○ ぼうぼういか滅のゆゑを、舊き記憶を後現
 すとの鋭敏もは、うしと例のレヨウペン
 ハウエルのうし

○ 商標と商戦の指物

○ かなたの武王とペンと並りんれ刺る

○ 中あしを荒し風景のよを地すのきこころとて
 りんば、記憶を能く宇宙のゆゑ味を地す
 ー

○ 天才は記憶を、鏡の如し、遠きを望みち
 すんも遠きを親るるる也

○ 古おもて、四言の海入る、改るる、美術表

右三人一様

一和共儀市二月十^九日前者平八郎徒堂を催
當表市中名々放火及乱妨を被召捕御吟
味御存也

此段和共之内力うはる所御新紀云丁目大
里和和市始二而ひろと一と申十ヶ年以
前不計平八郎と齋通いし同人妻をい
しと徳之由に者之を得共和市方ハ茶茶分
海世も平八郎儀共節勤仕之身合うけ
外也也何處儀と同人元孫を以て振物
流般寺村忠兵衛方一旦引取同人と妹之

東林堂

因又と結方うと改名之上平八郎と相成也
九ヶ年以前丑年三月同人存寄有之方義判
候儀いし忠兵衛掛居爰に引移り儀云
いし儀は振物吹田村氏神祇之宮脇志
摩娘を七ヶ年以前辰年平八郎養女
ニ養育せり也儀いし養育いし
快平八郎申候其節も同人方江立物
多儀云々之及儀ハ前者忠兵衛娘ニ而
八ヶ年以前も平八郎方江死然末も養
子格之助妻ニ可嫁合契約也有之由之
格之助は儀いしを嫁乞由ニ而四ヶ年以

前七月以平八郎と齋通申掛其意を隠し
及齋舎夫日四人妾に其母を得て平八郎儀
ハ傳子おぬ目川人共々數多ありて留子之七
の七不あり其しゆの手に前を懐き其子
をぬれを喜ぶいりし儀ハ深おる也其子
言ふおぬと別間を補理私共儀は其不
と決り外と出申し門人共ハ不及申格
之即ちも絶る面分り不決儀ニありぬ儀ハ去申
十二月男子致出生て平八郎儀之りの大
塩此相名乗候得共元来今川義元庶流に
付在男子ハ本姓為相名乗由今川

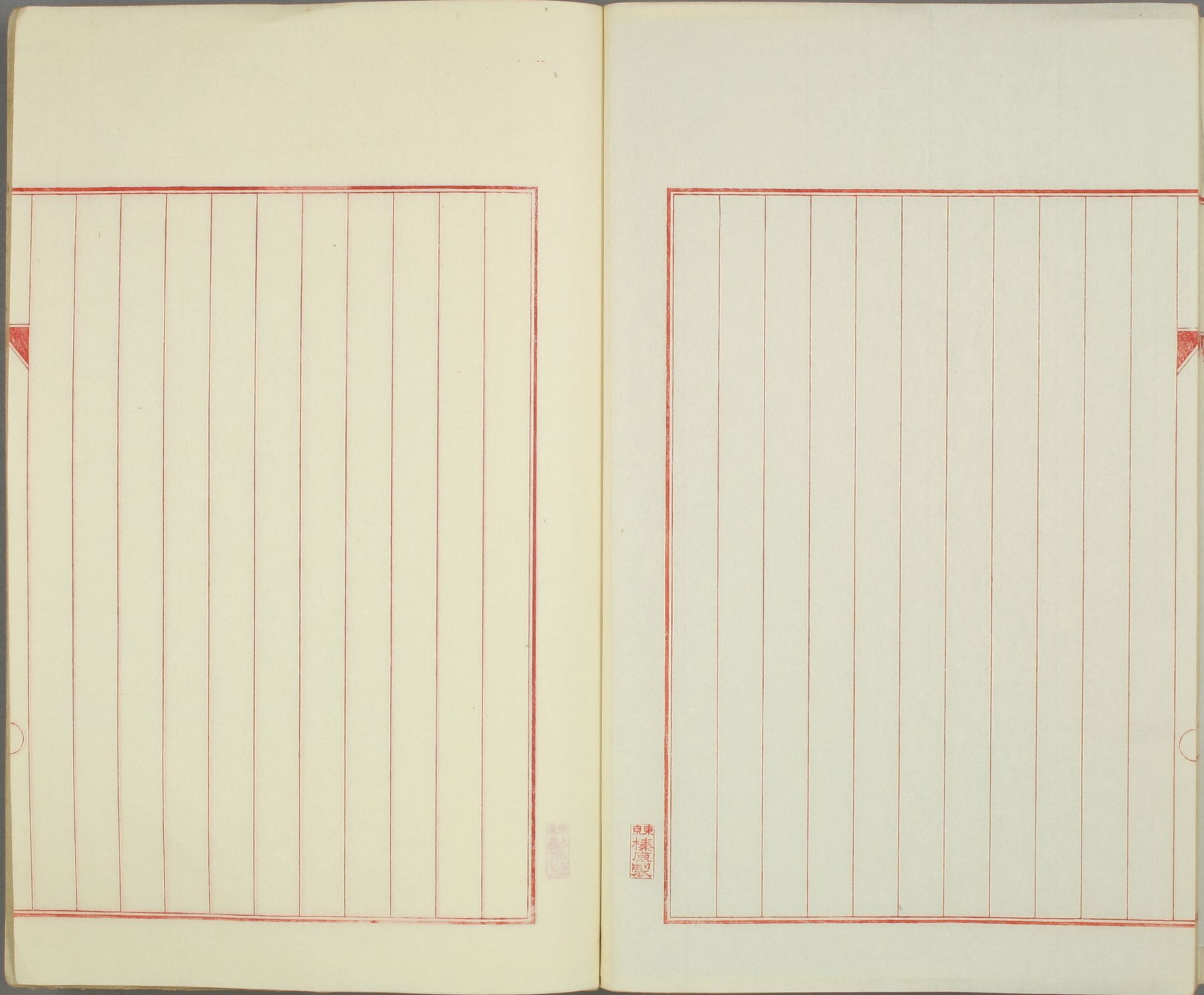
子太郎と名付親に養育罷在る家由儀
ハ近頃多病に掛れ而三月以別し不掛勝
女河儀は産後引續快後不決為此終に
罷在しを始終平八郎心不叶掛子と為
而二月七日日人ハ其子ハ女と為り保
養育いり法其忠告無方以死儀と終りし
其子とを掛其意に隠し私共并子太郎
お女りの名在忠告無方以死儀と終りし
差支之助有之是日同人家内之儀に申儀
ありし人同抄伊丹紙屋寺書印一万江
可及本を執申し同日十月十日忠告無方

始る承勅入一河在無入々々々
右之通お事ありと云々
辨可申上又次上

酉四月

ゆう
ふん
いぐ

東林堂製



東
林
堂
印

明治三十七年一

月下浣

熱海客中

春城山人